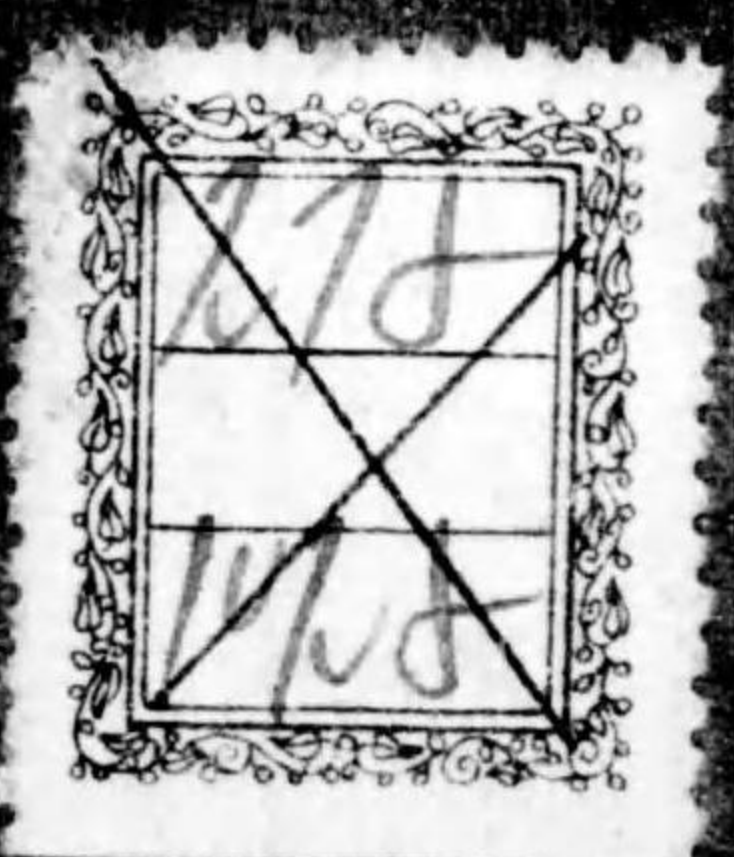


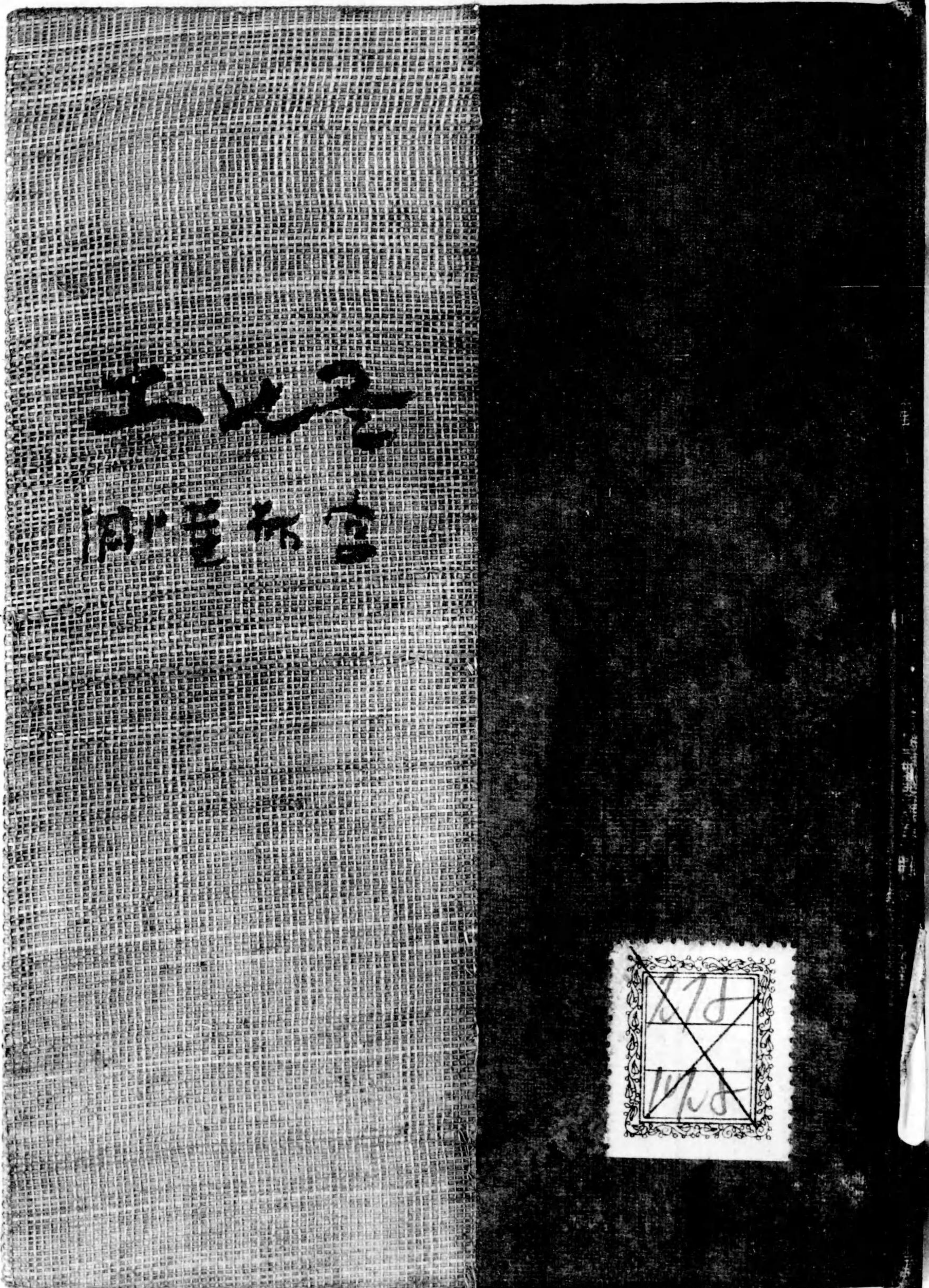
始

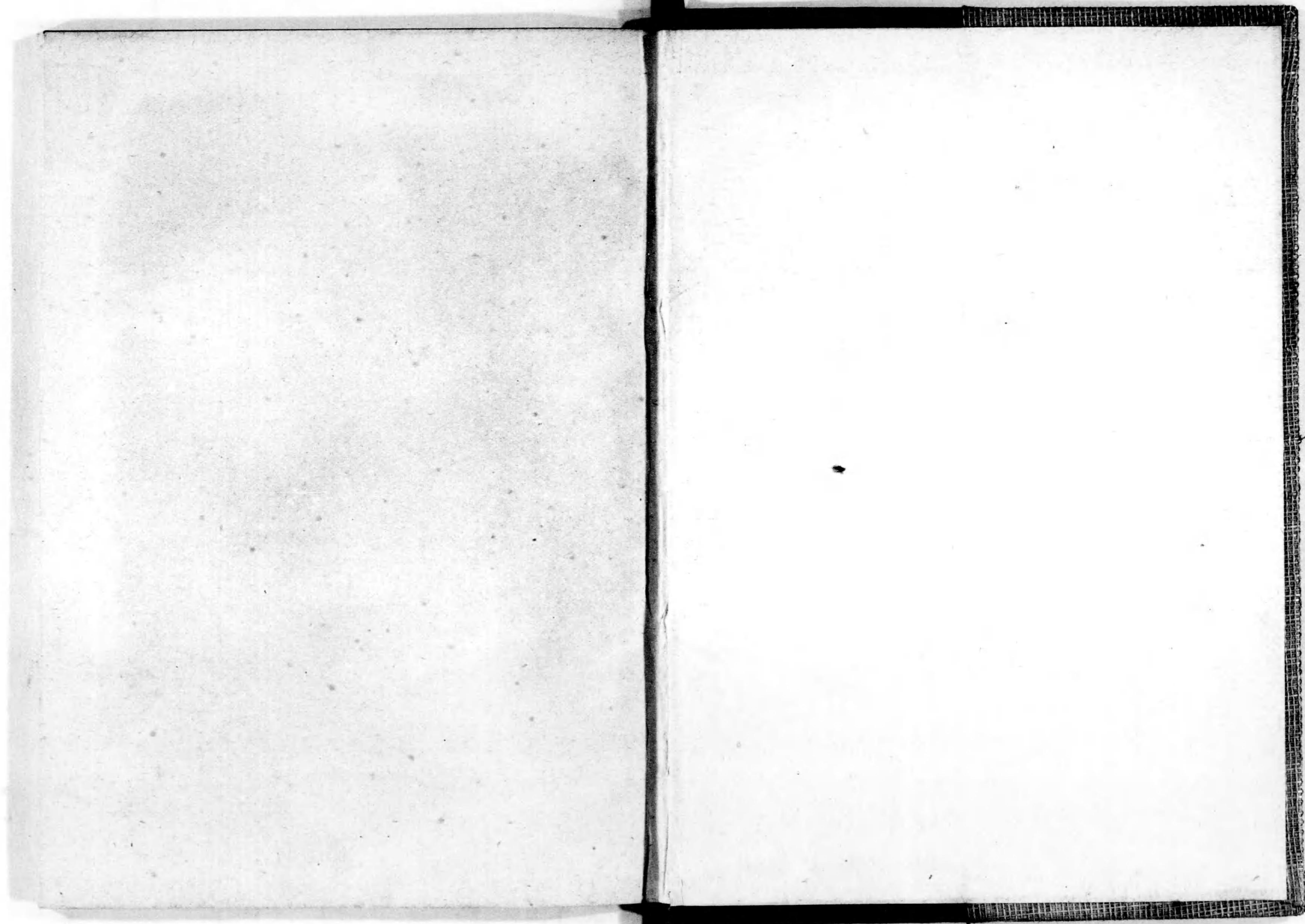


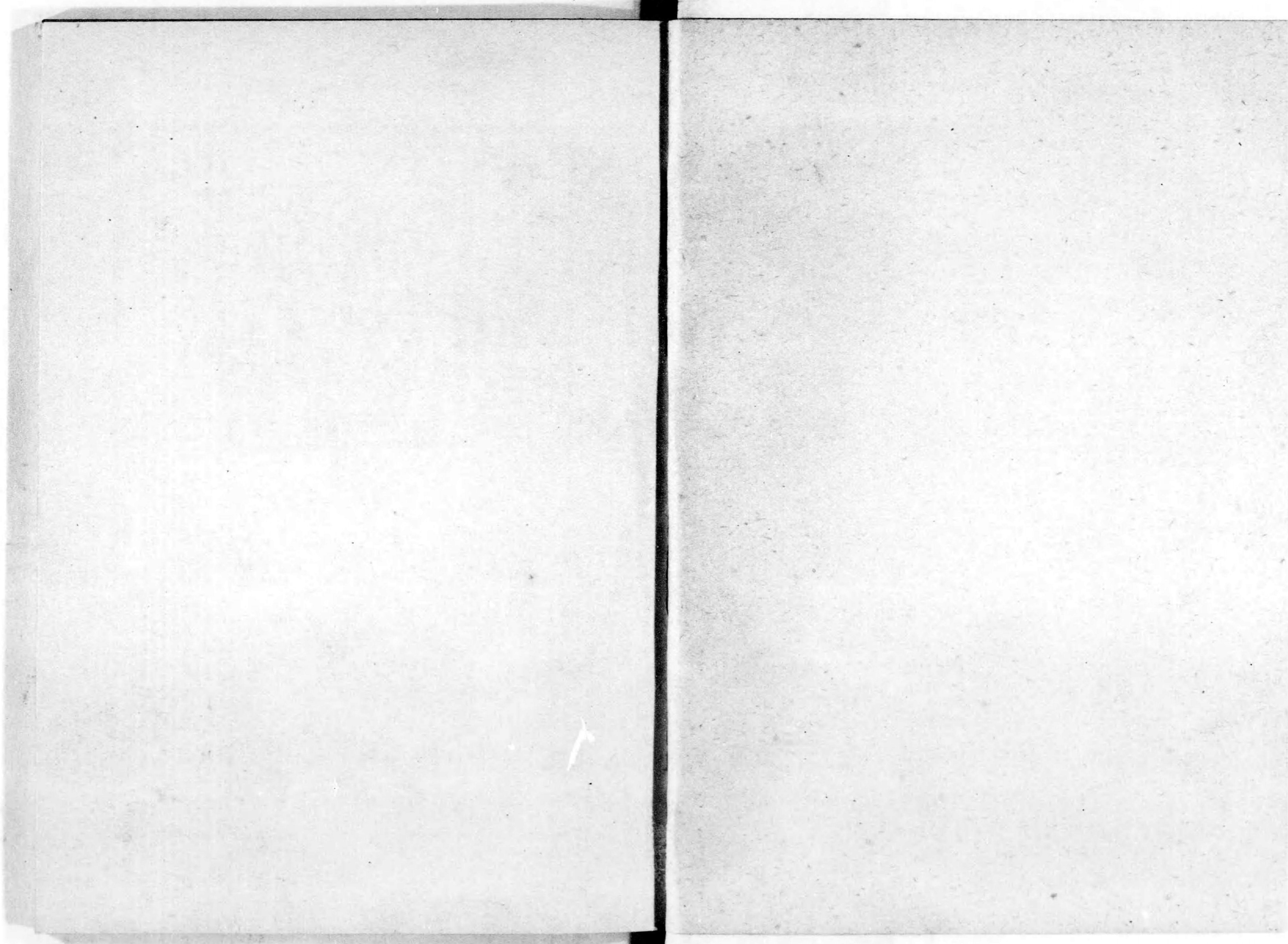
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 ¹⁶/₇₀ 1 2 3 4 5



天
地
人
道
大
同









土 の 冬

作 哉 董 林 宮

大 正

6. 6. 14

阪 内 友

店 書 葵

特 101

400

此の深く炎天此水
流るゝかな

畫引

此の深く炎天此水
流るゝかな

序

これをせまつてくるものさいつてもいい、ひびきさいつてもいい、やみがたいちからさいつてもいい、ゆめさいつてもいいうつつさいつてもいい、苦悶といつてもいい、何さいつてもいい、そこににんげんのまこさがあればいいのである。やみがたさがあればいいのである。

わたしの母はいつた、五本の指のどれを傷めても痛いよ、そのいたさがあればいいのである、足から出た血ミ手から出た血ミの差別はつきたくない、そこに血の赤さがあればいい、いちけた花にも、咲かねばならぬやみがたさがこもつてゐる。

けふまでのわたしは、かなりうろついて来た、それは極く手近かな、自分自身のこゝろを凝視するため、自分自身を知る

めたであつて、さうしたうろつきの果てが、やつぱり飯のありがたさであつた、わたしは、そこからあらためてあゆみをはこんで来た。

俳句らしい俳句の時は過ぎた、にんげんのまことのやみがたさは、まごまるべくもない、飯のありがたさを思ふと涙がこぼれる。

わたしのやうな、世才のないものは、土にしがみついて、そこに平和を希求め

るよりやり方がない、土をはなれてはそ
らおそろしい、食ふものは土から湧く、
わたしはここに落著いて、にんげんのま
ここのあゆみをつゞけて来た。

にんげんのまここは、自然のまここで
ある、自然のまここは千變萬化きわまり
ない、そこに美醜をわかつはにんげんの
心のゆがんでゐる證據である、にんげん
のまここをあるいて来たこの集は、是非
にんげんのまここに目のあいた人々に讀

んでもらはねばならぬ、そこにおたがひ
に發明するところがあらうと思ふ。

まつばだかのにんげんには、せまつて
くるものがある、やみがたさがある、そ
れを痛感したのがまここの詩だ、この集
は、わたしにまつてはまここの詩である
土にしがみついて咲きはじめた蒲公英の
やみがたさである。

わたしは「土」の一から、即ち大正二年
九月から大正五年九月までをこの集に收

めた、附録の「草筋ゆる」は、大正二年一月から九月までの草稿から、鶴平氏がひろはれたものである。
 わたしは、いよくこれからである。

大正五年十一月

宮林董哉

目次

再巡の 炎天の 園日 法身抄 哀傷 しくれ 雲 しのぼらく抄 めぐりこよみ 泉光 母草

一四一 一四五 一三三 一三三 一三三 一三三 一三三 一〇五 九五 六八 四一

やるせなければ
 この猫を見よ
 ひそまりがたし
 光明流轉
 はろかなるかな
 伊吹山抄
 曼珠沙華
 附 録
 草萌ゆる

一七一
 一七四
 一七五
 二九三
 二二八
 二三〇
 二三三

再會

花野より稻選り出でて住みにけり

腰据わし土冷ぬをるや秋日和

胸くつろけていつもの母が秋晴る、

秋晴る、人も虫けら土御臺つちみだいに

堀返して日に笑む土や秋晴る、

泣かれじを土いぢりをり秋晴る、

泣く汝には秋晴る、鉢の木なご見す

秋晴の土うつくしう蒔けるもの

鍬の土 桑の葉をむしりて拭き

脛を這ふ草の實の露流れなり

露しほりし腿引の皺に日のたより

闇の露降ればの毒を岳はくろし

草莖をつたうて土に下る露

露甘き夜ルの地藏の肩にのほり

日のめぐみあまねき秋晴れにけり

鼻手術時候の蚊帳はてにけり

藪残りする蚊や柘榴忘られて

稲架はきかけの梯子のほりに廣き空

京真葛ヶ原にて

東山は靄の冬日のにほひかな

露はれの虫けらに歎休ませつ

泥つくねても人の生まる、野菊かな

土の營み かくまで稲は穂垂れして

蜻蛉のまぶしき空や谷の竹

二人をれば二やうにおもふここの夜寒

藪鳴れば戸鳴りまたる、夜寒なる

田にガマの水の温るめる夜寒かな

稻架結ひし繩きれの腰にありける夜かな

夜寒焼く梅ほしに火の息やみつ

生くるきわみ虫達のなく夜寒なる

茶の花や呉れるここにきめし日の猫のかほ

胸にたゝめば刻めば夜寒浪の音

返事聲のはれやかさ呼びし夜寒かり

晝浴びし日かけの緑り夜寒なる

筋の太い手かさねて聴き居る夜寒

夜寒寝る前静かに座せばわれ獸

子を抱いて芽ふねの麥のまひるかな

茶の花に米まけご野良雀なる

やはり母は女なりける茶の咲いて

茶の花に疲れつゝけふも探したる

われを封ずる袋こ思はれてならぬ日の花茶

産れ子のもろき死にやうを咲く茶かな

摘みさいなまるゝ壽命を咲く茶なる

何やらに心こられて居し暮るゝ茶の花

野良癖こなりし手拭茶の木咲く

秋の蚊や抱きながら乳首吸はせをり

鉢に植ゑて葉立ちする草なる爐かな

——大正二年——

火燧ごもりの戸あければ鳥死にくる

顔ならべて冬日のたより待つ子かな

冬日あびをれば人の来て立ちふさぐ

鉢に聳ゑられて裸木の冬日吸ふかな

石を大事に枯野に落こしきたりけり

枯野の日誰れ浴びるこしもなく入りぬ

日のうちこらへをりける涙あられ降る

干靱に持ちこらふ 伊吹あられ雲

ひる近き土に吸はる、あられかな

堤へ出れば霞ふらして消ゆる雲

逢ふもなやましう樹を仰ぐあられふるなり

足駄高う高う張る掲示年暮る、

何う手探りしても出口のない寒の内かな

生きてゐるこゝろやはらかな寒の内かな

何のこゝちなしに寒の水をのみし二夕朝

落葉してあらはに家を圍ふ樹ら

葉落こして根まはりを覆ふ樹なるかな

やがて空高う野良へこぶ落葉になりぬ

櫛ははらく落葉して柏葉枯れなり

落葉せる山尖りけふになくなりぬ

かた足の虫こびまけてをり落葉降る

煤竹にをりをきり迷ふ藪なる

煤掃いて疲れたるつめたき壁かな

戸にあたる風になりゆく冬の月

さうでもよいこゝを氣ばりし晝や三十三歳

足跡に日影たまり麥芽ぎりけり

土をもたけずに芽ぎりくる麥かな

子の怪我も遊ぶ日の麥芽ぎりたり
麥芽ぎれば一日も早く引きたき蕪かな

いこ靜かに目覺めし寒の日の出なる

行李柳田挿しの絮わたこなりにけり

いつまでかうして日和の柳吹く風なる

そ、られてひよんなここになりし柳かな

川治めてけふある柳田の廣き

田柳に養蜂のかうも廢れてゆくかな

柳垂る、顔みて泣けしひる過ぎぬ

こ、ろふらくけふも柳を巡りぬ

病みほけても壽命は別なやなぎかな

さう見まはしても柳に首くゝる枝なかりき

うり物買ひしさへの罪ミ科ガ冴ね返る

また泣けてさね返る夜更静まりぬ

さね返る世の水底に落ち著きし石

鏡おそろしく雨降る冴ね返りけり

さねかへりてなごわけもなく應答す

落こしばなしさき、は捨つれご冴ね返り

降つては晴れてはさねかへらずに重き首かな

さねかへるたましひは樹を見てをれり

踏みしめても踏みしめてもくほまずに冴ね返る地かな

さね返れば人々を搗きまぜてみたき白かな

幕のやうなものにくるまつてゐればさね返りもせず

さね返る麥 葉を垂れてわれ慕ふ

磧へ下りて川水含みたき春かな

川は流れてこぼれまらぬ春の無功德かな

梨の花芽のはゞきこほれてゆくかな

耳おさへても岳のすり寄つてくる春日かな

草の芽にこりまかれて暮る、春の日

春の日の大地に味噌をすつてる獨樂かな

さね返る心ならまし折れて出づ

春の川浴びるには心置かれて

犬が一日一日と馴染んで行く春の日かな

蹴にふれて蛙死にかけし春の日かな

春の日の梨の根に出かけてくる杉菜

子に玩具貰うてあはれなる春日

髭の生ねた子供こいはれても春の日かな

かくすのでもかくさぬのでもないここの春日かな

犬に見すかされし心を花の散つてゆくかな

人がみんなあんな方へ歪んでゆく 櫻

呉れてやりし兔に惜しみのかゝる花かな

繩をぐるく巻きの世に花のちるかな

野の花につかねても尊き手かな

家まわりの花から咲いてゆく山かな

太陽 ちらつちらつこ圓き日の櫻

いくつもの記憶の顔が一つになりし花かな

風が吹いても葉伸びする麥の春日なる

春の日かゞやけき天井の下なる人ら

大地に鰌がおさる春の日の御佛かな

血をみて死にしやうな氣になりて眠き春の日

虐けられし心なり水をのむ 雲雀

排水溝をつくる

雲雀なくザクミ倒して心の残る麥かな

うねるこゝろを蹴もうねつてゆく 雲雀

腰のばさうミ欠伸しやうミ雲雀は鳴いてるかな

雲雀なく底のない釣瓶でも汲める水かな

うらゝかに女の腰を揺する汽車かな

青麥にかせぎをり われの人の父

人のために観る易を花はちるなり

家にすくんでをるも商ひの柳かな

掌てのすべる蹴の柄い照り麥青し

莖伸びする麥に負けぬ氣の梨の花かな

土持ちの中棒に立つや麥青し

青麥の暗き影午後四時過ぎたり

青麥に土持ちしてゐれば理窟もなし

青麥につかひよき新ら鋤重たし

霜が消れて日馴れてもうなだれてゐる豆の花かな

阿呆になつてゆく氣安さ 麥青し

追はれ、ば逃けてゆく心 麥青し

腹がふくれる飯のありがたさ 麥青し

戦ふなご迷惑なこごなり 雲雀

青麥にころと出て腹のでかい蛙

霜やけの梨の芽い照るばかりなり

木が氣の毒でたまらなく蒼間引くなり

けふもやはらかなたましひが青麥に交り

貴様こはオレさまのこまか麥青し

掘り起してやすらかな槻の根なり 春日

こゝろの中のこゝろありあり 槻芽ぐみ
人草木われ草木の芽張りなり

冬の不順花に持ちこせる曇かな

木の芽みぞる、日なりくつろぎの藁仕事

梨の蒼を氣づかひつ、曇に灯し

椿の花土に埋めてかなしきかな

槻の芽にこゝろおろそかな午後三時

風荒ラの春日中まぎれじあり

梨無駄花もいでゆくほろほろ落つる

春日堪わがたきひるの汽車がミヅろいて行く

ふけごもふけごも涙ねばりの春日の日かな

春日の日のかさねても虫捕りし手なり

ものさしを持たぬ身にありがたき春日

春日の日ありがたければものうきかな

おほろの月にあるく影けものなりけり

春四月十三日手ずれの珠數をもらひけり

つぎ様も智願童女も人の世の名なるおほろ

雨のおほろ風のたたかひ静まれり

吹き降りのあたたかき夜なる珠數かな

墓に参るなつかしさうれしさの柳

堤あれど湧く水は防ぎやうのなき柳

伊吹駿積雪消れてゆく梨葉になれり

萌ゆる草に黙つてすくんでゐる女

何故もの言はぬかき思ひば柳なやまし

襟垢を見やる念佛のやなぎかな
女の世界にわれら悪魔のやなぎかな
萌ゆる草に女の捨てて行きし足袋

春の日になほおろそかなわが身かな

日の出ちらほらの紫雲英咲き満ちし夕かな

すらくと穂孕みし麥の瘦みゆる

人なんぞ日はむして大腹の麥

ひるから全き若葉になりて暮るる梨^た柵^た

夢から醒めて眼をあけし顔の蛙よ

理窟でおさまりのつかぬいのちを蛙なくかな

足もとをみて居るんだこいはれても蛙なくかな

麥の花にぎっぞして霧を降らせたくなし

花散り散り技巧づけられゆく子かな

圓日に黒穂の麥が泣いてゐる

けふも廣き空をたよりの雲雀かな

純念の流轉平和の雲雀かな

いたづらに生くる長短 雲雀かな

ひだるくなれば蠶豆の匂ふ雲雀かな

佛像にさへの憤怒や鳴く雲雀

泣きたくなれば泣きまするかな若葉

行く春の野良にはてしのない輪かな

擁しては離れては擁しては離れては行く春

ざつしもなくちから解けし棕櫚の花なり

空からはけし麥の霧麥におさまりゆきぬ

第二十八回誕生日記念

雨蛙松に鳴くこれも宿縁かな

この負ひ目何時はたすべき若葉かな

ごうごいふことなく疲れしを鳴く蚊かな

葱冬の花に日いでて朝寒き

波空君を甲ふ

棕櫚さみたる、ぢつと黙つてゐし君なり

麥刈つてひろびろ梨のよろこべる

麥打つて疲れぬ　しきりに赤子見たき

赤しぶにまかれし麥こうなづきつつ

朝から刈りし麥見返りて午餉なり

麥けふの風やりなみ風さなれり

竹の皮おつる頃蛇すこやかなり

皮を脱ぎかけて崩折るる竹の赤き晝

ふらく／＼さけふ暮るる竹の若やかさ

人なんぞ竹は皮脱ぐそれ見たか

人はぐれせしにも夏の花あまる

首のぼしておこなしくく、らるる鶉かな

悼

けふまでの赤子の父の眞夏なりし

入合の鐘を聞き聞き蟬一つ

まつ裸梨畑の夕風の中

何やらにめぐり逢ひしけふの裸かな

巡禮

あの人もやうやく土用前に斃ちたり

草に木に充分の暑さ漲れり

暑さまけしてゆく岳の肌あらはや

さうのさばつても知れたものをのさばりたがる暑し

産みつけられし仕様なさ蟬なくなかぬ

いたく太りてすこやかな人に草茂し

炎天のみの虫親をはなれゆく

病中

おのれもがざりし梨の氣咎めうすくなりぬ

遠き子供の泣きやむまで梨見つめをりし
眼から涙のこぼるゝをひろはんこする夜長
枕元に梨一つありたいもしう寝ぬ

風にも水にひこしき渦の眞夏かな
何もなし何もなしま赤ま夏の陽

枕してのびくゝこ長くなりし晝寢

大地踏みてま夏の太陽の子の歩み

梨もがれし母樹の氣落ちよのびやかよ
打てば地面のひゞくなり梨のかがやき

麥稈が眞秋の土に成りゆくや

人いつもぐれはまな芙蓉曇りをり

南へまわりて風やはらげる草の實よ
ほろここほれて草の實のまかゞやきかな

實を急ぐ二葉の草のまひるかな

稻の花もこまで濟める陽の波よ
陽の波の渦巻く稻こ成りにけり

曼珠沙華ま莖すくすく陽ゆらゆら

秋の日の影かたちもの、ゆらくこ
つかみしめて秋の日ゆら、何もなし
ゆらゆらこしてまたもまたもま秋の陽

もの、匂ふばかりなる秋の日も中

秋風の海へ流れて風ぐ川よ

秋風や握りしめし土のかゞやき

秋晴る、人に齒車まわるのみ

秋晴る、爺婆の光り野の光り

歪みなり真直ぐの溝の秋晴れたる

秋晴れの女しなやか杉光れ

秋晴れの夢よりすらくゝ屍

秋はれて眠る子の世界なる背ナよ

秋の陽のぶくくゝふくれゆく布團

筋つけて境ひせし心なる夜寒

人害なはれて食ふにも慾の夜寒なる

一つより支れし數の夜寒なる

夜寒かゞやく壁がなくなりし心や

夜や、寒潔ヨまりて流れゆく血なる

踏みかたまりし地に落ちて傷つきし柿よ

はちきれる柿の種なるこほれをり

ただ甘くなりてしまひし柿なる

柿の皮ながくつづかせてよろこびぬ

枝の柿よろくらかつぎまわる子かな

岩の顔はれやかに抱きしめし露かな

露が吸ひこまれてもふさがらぬ穴かな

露にぎやかなるつゆの中の露

露まるめをる身に襷なかりけり

つゆをまるめてるるつゆなりしよろこばし

行人の思はくは思はくの露かな

秋晴れのこわれゆく玩具なるかな

棺を出でて廣野のつゆのにぎやかなる

長き夜の腐木の上の臍の緒よ

くたびれ長き夜の背をのほりつめて消ゆ

長き夜の蕙の目より萌ゆる草

符牒洗ひおこしてのうなづきの夜長

菓子甘し甘し青く甘し夜長なる

鶏頭の砂の陽の影の音かな

鶏頭の羽ネまかゞやく影の音

さやく／＼さけいさうの影の音稔る

地にあらは盛られたる芋のすこやかさよ

芋掘れば乳房まさぐる陽の手かな

ころがりてほろ乾く芋の死の假面

白き血のかたまりの芋のま秋なる
芋の血の赤くなりゆく浪の音

芋を收穫とられてしまひし雨の枇杷の蒼

土御臺に落着きてかゞやく豆かな

豆はぢけ落ちにける莢白ろの陽よ

莢を出で、つぶらなる豆のつぶらなる

笊の中の青蜜柑みづみづしき

夜を明るうしてをり青き蜜柑かな

青蜜柑茶碗に水を満たしたり

野の萩の息のほやけて暮れにける

萩眠りゆく母星のひかりかな

稻架造り 影あるもののかげひなた

影さほく道みちの芝枯れゆくや

ふたりの土龍が背のびして焚火して居るよ

もけ残りの葉もけゆく梨のしづまなる

光まばゆく降る曇り日の枯藺かな

ひかり降るこほれし草の實は見えず

梨の木に緑りの靄のふゆ日かな

彌作ミ書いてみし土の乾く芽麥かな

冬の日のおだやかなる息苦しけれ

冬の日咳けるあまの人間臭ささ

冬の日人間くささ雨になりぬ

冬の日ほらるる 下肥を汲む

冬の日あゆみの中の下肥よ

芽麥葉を出し人間のながるるをみる

唯死なしめしミ思ふばかりなり芽麥の陽

緑りの輪はめぐり 年あらたまりゆく
年あらたまる土の輪の土緑り

——大正三年——

鳩ひこりひかりかゞやき時雨けり

ほろ時雨して桑の葉のもけ落つる

陽の中の芽麥ほろく時雨けり

何處へゆく身づくろひ人の時雨や

抱きしめて赤子かゞやか野の時雨

しぐれゆく馬の圓光野いつぱい

うららかながら中空を雪の流るるや
野の人の頭かゞやか雪ながるるよ
雪のながれあざやかに跡方もなし

雪のながれやみにたれぎも人ひさり

雪ほのくながきながき馬の顔かな

陽の空の何處から降りし雪こんこ

さみぎりのいのちいごしの冬の草

地間なしの冬の草なを節根出し

冬草のつほみつぶらかなる陽かな

冬の草埋められしままの白葉かな

雪ふりのうれしさかわりゆくかな

廣き野のすみやかに降りし雪かな

おごりあがり夜つびて降りし雪拜む

おだやかに腹のへりゆく雪降りぬ

雪うらら足跡より土出づる

お多賀さまへ關ヶ原より雪になりぬ
詣らねばならぬまこころを雪になり

暮れのびの日さしの木の間雪こんこ

雪やつれせし麥に地息のなびきをる

爐火ほがらかなる夜の涙ぐまれけり

掌てにこけてつめたき雪の不思議なる

寒明けの赤子の背のびつぶらかなり

麥の葉を風ゆるがして寒去ぬる

餌をひろひありく雲雀や寒去ぬる

ひそくゝさま、ごころの二人寒明けぬ

降りたけな空の陽の目の麥葉立ち

たんほゞの地に低う地を這ふ葉かな
たんほゞの地から誰れくねごもろな
たんほゞや赤子に惚れて泣いてゆく

野ざらしの頭光の上の雲雀かな

こちら向いてねんごろな彌陀かけろへる
まろき彌陀かけろふ花の母子草

土まるけの陽炎の眼まるけの赤子
眼まるけの赤子這ひゆく麥うらら

春雨の晴れしあそびのあなたなる

野法樂に咲け咲け椿藪卷す

枝おろし迷ふ花芽がおざるなり
枝おろしてうら、かに心くたびれぬ

雁の列

穴一つのつぺらほうに陽炎へり

うら、かな土龍の屁 臺に立つ菜かな

伊吹白妙素敵な霞土持ちす

うら、かな雁の列鋭角なり

うら、かや波紋の中の猫の舌

白妙の山爆ぜて うららかや風

乳ほぐれせぬ乳房なるうららかな

おてんごうさま見通しのうららかな

うら、かな青い鳥乳をした、らす

空の中うららかな水がまんく

泥鈴おざりゆく森うららなり

枝まけて梨棚にぎやかなるながめ

泥足を洗ひたればうらら鈴が鳴る

泥まるめておかしかりけるうららなり

風呂敷の中で鳴るうらら泥鈴

陽はころりく、うららか天の陰部ほら

何處までもうら、白ヲ畑エツサツサ

枝まけて花芽に孵る虫早し

雲脚のうら、かながら寒さかな

青麥の渦湧きあがりもりあがる

菘の火借りてさけたる頭うららか

瑠璃光の麥の列うららかなり

麥の列うららかや陽の水見ゆる

鳥の巢が樹の上をおごりありくかな

鳥の巢の陽は丸いものうららなり
頭をあけて巢鳥かがやかなる野かな

うららかな槻 鳥の巢を捧けをり

鳥の巢の赤子一心敬禮す

うら、かな世の中に腰のひくさや

白畑のけふの吉き日を雲雀かな

ねぢけゆく浮世憂いもの霞みたり

人間もの霞みたれ蛇のたくるかな

車ゆくうららかなるかな二つの輪

彌陀ませば巢鳥巢ぐるみ奉献す

こりやなんだいこ魚樹にのほるうららなり

うら、かに悔ゆる言葉のなからめや

念力を願たれてうら、かな草かな

しのび足の彌陀めざましや草萌ゆる

沈丁花思ひつめたる目さめかな

反逆のこ、ろ腐ちゆき草萌ゆる

波の上彌陀がチョンコしてうららかな

漣の千手きらきら芦萌ゆる

梨の花白う宿酔の涙乾くかな

かけろへる種子^{たね}目をあけて芽ばゆるも

うつらうつら麥大腹になり^{なり}にけり

いごものごかに花ひらきゆく梨かな

桑の芽立ち薬のむ人のみじめや

春の日 のつしく^くこ芽生^はねせり

春の日のうめよふやせよねんやらや

春の日の三遍まわつて子澤山

こんこまやかな空の芽生ねよ草蒨よ

蒔きもせぬ草がのんくすいぐこ

潮時を浪にきく浪の列うらら

野つ原の佛のぶさま驩かん請ちよ草もゆる

お陀佛の欠伸のんく鳥うらら

麥の穂が出るく喧嘩やめなさい

春雨がぎうでもよかれわるかれこ

くたばれば黒粹の世の中うらら

春の夜の藪をくれば笹が鳴る

人の子の家越しの車かな 雲雀

善光寺詣りしてからの二老人うらら

爪ぬきの草かれぐの春日かな

ある風かぜして着てをらでもこうららなり

春の日の骸こがらを焼きをれるかな

人も押しくべて燃やしたる灰の春の日

それからなあこうららかな腫かな

行く春の桁たてにのらなきやしちやくな

皮かぶつたばかりでも人のうららなる

土龍つちりゅう挿るこてうろつくうそつぺのうらら

親馬鹿チャンリンでもない雲雀空の中

聾の子の啞でもなかりけるうららなり

若草に干して白張傘果敢な

こめぎころなく麥の芒はだかりぬ

麥の穂のぱきくねぢれゆくなり

かみなりさま鳴ればはなるる手なるかな

春の夕間暮なる　かくれ鬼の鬼

珠數つながりの中の地藏の目あく春

赤子泣けばすいこ青鷺何處へゆく

麥の上　夕立の雲別れして

豆蒔きのかみなりを怖がゝる二人

かみなりさまでんでん 豆が芽ぎるかな

みなかみのかみなり海へ鳴り込めり

下肥汲みにゆく青鷺がうれしき

夏の爺おぢのまな子なるかみなりでんでん

さみだれの田の面粒あざな々山へ行け

さわやかな笑みかたまけて雷來る
かみなり湧きあがる梨青實かな

みづみづしき初夏の白き手なるかな

雨の若う人ひとおごりくる梨の青實や

陽のめぐり若やかな蓮の浮葉かな

浮世自殺期の麥の穂がくれなる

時鳥ほご目をさましをる夜かも

水馬ひよいここまひまひまひくこ

道の上 葉影若やぎをれるかな

顔かくして顔かくし青葉がくれなる

大麥の穂強姦を渦卷けるかな

麥なびくおてんこさまのお水笠

なあ蛙一服吸つて寢よまいか

初夏のいま新らしき陽の出なり

麥光る野つ原でふたり寢てみたや

夫婦もの行けば蛙がおごるかな

一こ口頬張つて初夏をながめまわすも

難遁の麥の出来榮ひなりしかな

若葉むしつてあんく泣いてみたれども

麥を刈る鎌にも人の記憶かな

花標ももんぐわの夕間暮なり

初夏のうしろから犬が香ザ嗅ぎ來

死にかけし女に麥穗おごるなり

麥刈の人手足らはぬ嘆きかな

しんじつはるぐ大根のたわら稔りけり

麥苺りてわづかに稻の緑りかな

麥秋の女を乗せし夕汽車や

窓の幹初夏純金の花こほす

暮があさからのそく、こ食ひにゆくかな

初夏のまここ一念掌てを合はす

雞こさけいかう 筍のてつぺんの彌陀

麥の雨泣くに泣かれぬ小唄かな

なくしものに氣のつかぬ人々の汗

初夏のおこらでもい、がおこるんな

暑いなもしこいつてわが前を人過ぐる

橋散れ散るなあの子こ添はふもの

人魚つるみをりせんだんの花の上

花橋胸に涙の渦がまく

赤き日のそれ押せやれ押せ麥摺機

芒^{のぎ}をあたまからかぶりて麥なぐり

鶉かゞりの燠ほろほろこ落つるかな

指すつてあやまる夏の夕間暮

お、いこ呼んで馬鹿馬鹿をする草茂し

はたらけばはたらくだけ丈夫になる汗かな

お辭儀虫こりまいておじぎする子供

因縁がはづかしき粟咲きにけり

炎天來

麥苺られてかみなりの臍が眞赤な

山梔子の花白き夜の相惚れや

朝から變りもせず吹く風の蚊のひだるさ
風のあまのひだるくてたまらなき蚊かな

蛭泳ぐ泳ぐ血みぎろの田植なるかな

學校へ子供あつめて田の蓮華

子供だらけなる眞夏の陽うすづくかな

田を植うる女人かゞやく蓮華かな

西風さかぎか花茄子弱りゆくなり

西風さかく 螟虫ひろがりゆく田かな

せめてこ石灰をまく 螟虫田かな

螟虫田の畦豆 踏みにじりたきかな

螟虫田を勘考して犬あり

螟虫田になみ風を待ちこがる、

螟虫田の草を草を唄で取るかな

足が出てくればたまらなきおたまじやくしかな
おたまじやくしのおしまひの尾がそれ落つる

おたまじやくし蛙になり稻根付き

赤子蛙よろこびの水をはしるかな

ちりめんを織る女人もろ肌ぬぎなるかな

ほごめざましくほんこひらいた蓮華かも

汗まるけの顔あけて田の中なるかな

朝雨がじりじり暑うあがりくる

腰のばしてやれくこ汗を拭くかな

雨の根のきれにける暑さなるかな

心なしに使はれて夏至ちゆうのあねきなり

下肥汲んでもぎる青田の中かな

ま夏野の家赤湯巻洗ひ干せるも

炎天の線路にかせぎをるなり

炎天の梨柵がめりめりさがりくる

虫梨から水味がまわりて來にけり

炎天の日に日にあまけづく梨や

朝風の朝風の赤い陽の蓮華

蚊帳がくれ人魚の二つ枕かも

炎天のオコリぐらく發しくる

炎天のオコリ午後一時からなり
土用前の畑やすむオコリなるかな

炎天のにわこり雌をおさへけり

炎天のほぎをはだけて憩ひるも

蟻の道寢床へつゞき來りける

交合ひを玩具の人等明易し

炎天のマラリヤ蚊壁にこまりゐる

人間をうんすうんす引く蟻かな

蚊帳の中麻羅投げ出して寝たるかも

人なれば人に未練の汗なるかな

すつ裸になれぬみじめな人なるかな

晝深く炎天の水流るるかな

帷子の目にこそたたねはらみをる

はらみ女に空は眞赤な蟬鳴いて

親の目にねんねいのはらみをる 浴衣

はらみ女に南風なみかぜの梨うれたり

浴衣着てはらみをるあらはなるかな

炎天の割れるものならわれしやんせ

圓日篇

梨おろす爪疵籠疵あてずもよ

掌にして梨の圓光はかり知られず

梨おろして晝飯に戻り來けるかも

女やがて梨をむさほりはめりけり

鶉かゞりのけむり 曇りへしみゆくも

鮎のんでまた 吐かさるる鶉なるかな

二百十日のそよそよ風の中の茄子

二百十日ほろりほろり暮るる雨かな

二百十日の曇りの中をゆく鶉船

からださかりさして二百十日はてぬ

野分の中のはねつるべぐいさ汲まれたり

雲あしの雨まじり野分來るらし

稻の中に手をあけて野分防ぐなり

ホミ吹いて間なしの野分うづまき來

野分の爺おらが梨をほこりほこりおこす

さやすれのこの靉涙だにあらば

のし陽に向いてゆく曼珠沙華

子規忌

うまれざりし子の泣く聲の曼珠沙華

瑠璃の靉なみだかたまりゆく陽かな

稻の穂かしぎゆく寝さほけ空かな

百舌鳥の鳴く陽ゆらくまここ堪わがたし

秋晴れのまつびるま梵の飛躍かな

秋はれのまこここないまこころなり

喧嘩両成敗ぞもよ 眞秋の陽は一つ

秋の夜のたらかされをるけなるかな

秋雨の夫婦もの何をけんけん

つるみつめて螿螂雄オオをはみにけり

こほろぎばかりこなりつつ鳴いてをるぞもよ

まつすぐに岐阜道の曼珠沙華赤し

枸杞赤けぎ圓日泣きの涙かな

虫そゞろ菜をまく人のひる深し

ほろくこ虫なけばこそひる深し

月赤けぎ血の道の虫そゞろ

曼珠沙華赤し三人の子のあたま

秋はれの 大日輪おろがみまつる

秋の風かうかうこ吹き 竹出しす

生き甲斐の百舌鳥鳴きはけし 竹出しす

秋風に八の九出しの竹光る

秋深う賣られゆく竹光りつゝ

ま夜中にして秋の雨ざんくゝこ

女人ゆけば露がなう露がちるぞもよ

まめで達者で秋風のけふも暮れたり

あすこいふ日がなけりやよい曼珠沙華

はた織に鶴なく藪の夕日影

秋風の木の影長うなりけり

秋晴の山で草焼くしよんがいな

逢はなきや出来ないこころがある露散るなり

丸髻の女人ゆく見ゆ稻架つくり

秋風の蹴つ、ましう畑にをる

蚊帳を吊らねばのびのびのたよりなう

蚊帳を吊らねば流るるものの聲す

秋の日の大地ひつそりふくれをる

薙にひろけて湯ぶくれの麥の種かな

風の中にももの聲すも秋の暮

ほがらかにみごたのもしき抜き穂かな
田の中の日和定まるぬき穂かな

足の跡踏みおろしゆき麥まきぬ
麥まくや陽に向いておろそかながら
麥まくや静かにかはく鍬の土
麥まいて暮れゆく畑面ものの居る
麥まくや大根首をのばしたり

袖すりの稻架のにほひや露しつこり
稻の香の澄みて流る、美濃路かな

われを支ふものの燿き秋の風

ゆく秋のまひる深しも鋤ふめば

ゆく秋のはたけ打たる、まひるかな

うつくしや今ゆく秋の畑の奥

烏瓜さけゆく人のまひるかな

道のべの草の實はぢく聲すなる

ゆかしさや草の實はぢく草の奥

草の實の馬鹿につかれてもぎりけり

麥まけば鴉二羽來つ畑の奥

御即位式をかこみて

平民はけふのよき日を寢祝ぎかな

末枯や空の奥がの雲の列

雪雲になりゆく空よ伊吹山

粃すりのすらくゝこ米はしるなり

粃すりの粃ふきわけて米嚙みみる

粃すりや陽に照らされて頬かむり

法身抄

夢さうつゝの合ひの鐘

ごんご時雨てふる里を

はるかにのぞむ旅の空

そここゝに時雨ふりつつ野の夕日

そここゝに時雨の野何思ふらむ

野の奥所^{おくが}ひそまりて時雨^{ふたがた}二方に

鐵道自殺せし魯桑かもしぐれ來る

たぎたぎしき野にて肥桶しぐれをる
しぐれ二方に吾が釜屋炊ぐらむ
泣くは杏平の子なるらむ夕しぐれして
おさくさんらしも霜枯れの桑束ねをり
風はかうく地^ちに音たて、しぐれくる
ものの影二方へ別れゆくしぐれ
しぐれつ、白髪まるけの父と母
終の花のしぐれに兄は病めり
しぐるるや宮の槐の西枯枝
飯綱山正しくしぐれ暮れにけり

哀傷篇

人ならね
われさわが身に
愛想がつきる
不運なうまれさ
一度や二度は
あきらめたれど
なみくならず

いくら因果な
身ぢやさても
にくや病魔が
絡みてさけぬ
いつそ死んだが
まじかいな
死なうにも死ねぬみれんのしぐれかな
しぐるるや人に氣がねの小夜の壁
病める身のつらさいさしさしぐれくる

しぐれ雲

時雨雲雞なく方へのめしゆく

伊吹山池田の山も雪降り

山茶花のまひる深しも雀が三羽

木がらしの二階から赤きもの干したり

冬がおしせまりかゞやく地面ぢべたかな

思はぬあたたかな日でありました 落葉

山茶花のほつこりひらくまひるかな
さざんくわに鳥もこまらぬまひるかな
さざんくわや陽に照らされて唐臼居る

さざんくわに豆がこぼれて生ねにけり

さざんくわ咲けぞ赤湯卷日蔭なるかな

さざんくわに運ぶまゝ、糲こぼれたり

庭の霜土ぐるみ掃いてけるかも

吹くは北風泣くに泣かれぬ日の光

巡査になりたいさいふ子の親の冬

冬の夜の等しく黙りのつんなるかな

冬の夜の烟たがつたりがられたり

面目灰まるけの人々の冬

冬の夜の嫁ぎてまめになれるかな

さざんくわにむすめめつきり肥わたるかな

戸鳴りしんく静まり雪來るらし

冬の夜の女が息をしてゐるかな

所詮人間でありまするかな 落葉

まぐはひてのさかなる霜の朝かな

冬の日のまひる澄みたり梨樹の列
冬肥に日の移るなり梨樹の列

冬の夜のついつまされて子を見やる

冬の夜のものの聲ひしく病めり

つまされて泣く冬の夜の壁四角

病みては一も二もなき冬の夜なるかな

丸池にけふものんきな鳩なるかな

陽に向いて冬の川昇天すなり

冬の川昇天の渦ふかみかな

冬の川昇天の空のまろけれ

冬の川昇天の魚のかゞやき

冬の川幽かに流れひびくかな

のほらく抄

人の世に

泣くになかれぬ胸の内

うちあけられぬ

阿呆口

木の上から焚火みながめてる鴉

焚火みながめてる鴉に雀三羽來し

足らんでなあ お互ひにこ焚火してゐるよ

さういふな 泣くなさ焚火してゐるよ
貧乏も だんくさ焚火してゐるよ
親のない子はないさ焚火してゐるよ
このこと忘れては 世は闇さ焚火してゐるよ
ひつくるまつて寝るが樂みさ焚火してゐるよ
先きが見ねてもこまりものさ焚火してゐるよ
火は熱いか さうかさ焚火してゐるよ
ホドはありがたいものぢやさ焚火してゐるよ
知らぬにこしたことはなし焚火してゐるよ
親まで出して垢いふなさ焚火してゐるよ

ようもく ぬかしやがるさ焚火してゐるよ
道理なぞ いふなさ焚火してゐるよ
ごりや仕事にかゝろかさ焚火してゐるよ
南無阿彌陀佛火は赤いさ焚火してゐるよ
なあに捨さけほつさけさ焚火してゐるよ
南無食はにやをれぬさ焚火してゐるよ
生ま身もつ五人なるかな焚火かな
焚火して藪にいそしむ人なりけり

めぐりこよみ

冬の朝ほらけのせんだんの實かな
冬の朝わらぢはたいて穿いてける
笹葉ぱつみ焚いて出てゆく冬の朝
おらが鍛ここにかゞやく冬の朝

冬のあさ思ひかねたる多度曇り

瞳の大きなるむすめゆく冬の朝かな

江崎わたりの出代は十二月
二十三日なり、その前夜小
豆粥を炊ぎ、まめなれかし
さ別れを惜しむ。

ほひ出し粥身ごもれる身にして
ぬめく嘘つきし ほひ出し粥なる

われもつまされて

指折れば三めぐりのほひ出し粥なる
腹一杯のほひ出し粥やすらかなりけり

人間のたべる大根かけ干されたり

三十三歳ち、こ鳴く大根しなびたり
親もかうしてしなびらかせし大根かも
大根干して子が父こなり親こなり

親を戀ふる子あるを大根しなびたり

大根しなびゆくま、種子^{たねこ}根づきたり

地を戀ふるけしきに大根しなびたれ

大根しなびゆくまま人を箕ではかる
大根しなびゆくままに日が暮れるかな

神路山の箸おろしたる冬至かな

大根しなびゆくを見し夕曇りかな

おゆるしを願ひまするめぐり曆なる
よしもなの日めぐり曆影ばかり

めぐり曆死ぬる日の紙なる赤し

陽赤けばみれんのめぐり曆なる

都市めぐり曆のやつさもつさかな

寒くとも そけな大火は焚きあすな

冬の夜のこの歳してこ なるほぎな

人手にかゝりお果てなされし鴨一羽
たましひはなれゆく鴨の足こわばれり
鴨のなきが尻の毛までむしりこられたり

いちやうに師走の渦にまかれけり

町へ行つて師走の家鴨鳴きかはす

骨高な馬がひんく年の暮

また一人師走の線路またきたり

大空を龜這ひゆきて師走なる

師走ぞこ寄せては返す片波や

雲出でて師走の道に影つくる

年の瀬のそまつにならぬ命かな

年の瀬を誰れこさぬものなかりける

年の瀬のまここ甲斐性なしなるかな

年の瀬のやけに孕みし子なるらん

師走ぞこ總立ちの御ン目出度かな

年の瀬の紙幣きづが右から左へこ

年の瀬の雀堂つくられたる日和

ごろ董きんこいはれし冬の夜なるかな

恥しめるよりはほめこけ年の暮

二十九もけふをかぎりぢややれこりやせ

ゆく年の雑巾かけし顔かな

あしたからこれだけこ片手出す子かな

海門指を染めてこ太乙が年忘れ

さりとはつらいてなこの年忘れかな

大年のさよならと壁そりたつ

ゆく年の湯の漣をいさゞかな

——大正四年——

寂 光

神さまをたらかしの初詣かな
人の背をおがんでも初詣かな

初夢の黒い鴉が羽ばたき來

初夢の黒い鴉におぼりけり

初夢の黒い鴉に鐘が鳴る

初夢の黒い鴉が乳をのむ

初夢の陽に向いて黒い鴉かな

初夢の阿呆鴉のわたしかな

年始状火にくべたれば燃ゆるかな

年始状炎となりて燃ゆるかな

不相變の年始状なるかな

手毬唄しんみりきいてるる犬かな

手毬唄あたますててこてんこかな

さうか寒いかこいひしを怒る人かな

黙つてはをれご寒き顔なるかな

花賣の花は何々 寒の入

畑の中しんく凍解くるなり

凍解くる音澄むままの齋かな

手をひろけて焚火にあたりるる梨樹よ

身分つうろくせず 水仙ひらき

足踏みして地の音をきく 冬夕

わふわふと鴉なく寒の内なるかな
鴉なつかしき寒の内なるかな

梨肥の穴埋めてをれば寒の雨
寒の雨土が重たくなりけり

寂しけき空はさみごり 寒の内
麥畑になほ蕪るる 寒の内

サンソー液梨樹に塗る寒の内なるかな
梨樹にてんたう虫を見る寒の内かな
梨樹の根の土こすりおこす寒のまひる

寒中の幹下りして　みの虫

寒の内やつてこましよき思ひごも
手を伝ひひろけて見し寒の内かな

生殖しんじちをないがしろにす長火鉢

寒の内柳立ちの雲雀鳴くなり

天道埃　梨樹の列影づくりたり

天道埃　陽の中に老いし女人見ゆ
天道埃　風吹けばやるせなき陽なる
天道埃　き、耳立てき何もなし
天道埃　やつぱり母を思ひ居ぬ

年貢おさめて薬禮だけ儲かりしかな

ほほほほき汽車過ぐ冬の夜天かな

このたびは雪來るらし多度曇り

霜折れのせし空ながら家建つる

けさの雪畑にひるまでなかりけり

土持す赤き陽の夕伸びにたれ

冬の日澄みて 二本の足のちから

雪なければたぎくしき野つ原よ

雪なければ葉立ちする麥にてありし

雪なければたよりなの鴉かな

寒卵夜うみする雞こなりにける

寒卵 人にのまれてしまひける

やるせなう雲雀なく照り深みかも

やるせなう雲雀なく頬かむりすなり

雲雀なくまま御嶽はろかなるかな

雲雀二羽まごまごしてあがりたれ

ちうへんに雲雀まぶしうないてる

梅がなう梅がまごまごに苔みたり

ふごころ手出して見たれば梅苔む

寂光の荒ら風春になりくるや

すぬけ落ちて地面をころけゆく蜜柑

春來るらし山際の淺黄空

春來るらし伊吹山鋭角なり

雲雀なく雨はづかしうほろつき來

麥草をぬくべくなりぬ雲雀なく

濡れ草鞋こゝろよき春になりけり

春めくやおまへこならば何處までも

母子草

人なれば
寂しきものを
ひさすじに
けふのつさめに
いそしめりけり
草ぎるにしるきは母子草なりし

草ぎるにしるき齋の蔓起し

草ぎるに根ねばりの土うら、けし

うら、かに乳ふく草を草ぎりぬ

寂しけぞ泣くに泣かれず草ぎりぬ

日の光うら、かながら草ぎりぬ

生きねばならぬ人々に椿赤けれ

うれしさのしんからこんから 赤椿

寂光のここなごころの赤椿

赤子うまるる赤子うまるる赤椿

赤子のにほひ嗅いで來たれば 赤椿

三十三歳何しをるのや赤椿

二月初旬、しきりに信濃なる

父母のこひしく、やみがたき

こゝろのやみがたく、足かけ

四年ぶりにて故郷に入る。

雪うららかなる橋の連れありしかな

雪の野のうららかながら鴉二羽

涙ながれて寂しきものを雪深し

おまへ歸つたかいこ火燧から泣く母

泥になりし足袋ぬけば母が干して

まあ火燧へあたつてこ母の涙なり

火燧して長わづらひの兄にてあり
火燧して村のこまをこの兄の元氣

藁仕事やめて來られし父上

姪達大きくなりし 火燧なり

肥わなすつたこ見らるる 火燧

雪晴れの親戚まわり 酒から酒

飯山

赤き日のもこにて逢ふ筈の雪夕
火燧にてのむ酒の 骨肉なり

雪の善光寺に詣り いひがたきだるさ

美濃へ戻る

烟草さつぱり味なけれ雲雀なくなり

土かけば土の芬香のうららけし
土かけば土うららけし雀くる
わが影の土うららけしあさみざり

赤椿地面の光りゆれやます

春の日のうつくしけれさ寂しけれ

春の日の地面なみなみならず照る

子供三人の智恵の輪に春日照りこほるる

女人もつれゆく野つ原の春日影

春日照りこほるる中の棕櫚二本
鴉がカア雀がチウ春日照りこほるる

春の日の喉かわいたら鹽なめろ

散り際の梅の花よしもなう照るや

春の日の赤子ゑひして野へ出づる

うつくしう笑ふ赤子の春日かな

何事かはなす赤子の春日なる

冴に返りたる風立ちのにがこ藪

うららかな雞一心にいきみをる

うららかなまひるの卵うまれたり

甲易川君

高臺の春は悲しや赤椿

某君恪血

草の芽に大日照るまころあるなり行け

けふも子供の風をうらやましう見あぐ

糸くれてやればやるだけ風あがる

風よ吹け風に吹け乳一杯やる

子供の風を拾つてちやつこあけるかな

風あけの子供手傳はせてくれる

風寂し夕陽の中にくろすめりけり

風寂し天風地風夕ざりにけり

大まけに女にまけてうららかな
大まけにまけて野へゆくうららかな
まけて来て青麥の陽につきりけり
肥桶も来て陽炎の中なるかな

草の芽の明るたへうやまはれけり
草の芽のみごりたへ地面さよもす
草の芽つ、ましくも胸ちごよもす
草の芽ほがらかにあねかなる芽

春の日の雀に惚れて泣けるかも

梨つくり梨の木接ぎも馴るべく

一心がかよはば接木みんなのれ
接木して日をふる雨さなりにけり

信濃では涅槃會のヤシヨウマつくる

陽照ればあきらめられず接木すも

やるせなければ

雲雀ひばり慌てて下りて鼻つくな
ひばりひばりさうぢやそのよにそこ下りろ
ひばりひばりなぜなくそけになんぜなく
ひばりひばりおまへもまゝにならぬかや
ひばりひばりないてくれるな氣がもめる
ひばりひばり下りて黙ればやるせない

雲雀雲雀やつぱりないて居ておくれ
雲雀雲雀なまじ知らぬこいつておこ
ひばりひばりかうしたわしのあさましさ
ひばり雲雀これも人なるあさましさ
ひばりひばりこのあさましさ拭ふすべなや
ひばりひばりうつかりしては居れぬぞい
ひばりひばり人はほめられても怒る
ひばりひばりわしも合ひ間に嘘をつく
ひばりひばり人には義理がものをいふ
ひばりひばりしんじつ惚れても嘘がある

ひばりひばりせめてこも思はずにおこ
ひばりひばり泣いてなかいですまさうよ
ひばりひばり食つて糞して死なうぞい
ひばりひばりなんでもいい お日さまおがも
ひばりひばりないてくれるなないてくれ

この猫を見よ

地面照りかゞやけば猫さかるなり
ぬば玉の黒の猫今さかるなり
陽炎ゆうらゆら猫さかるなり
まここのかぎりなるまぐはひの猫かな
こめどころなくまぐはふばかりの猫かな
やみがたくないてまぐはふ猫なるかな

ひそまりがたし

梨畑稼ぎ枝まけの麥青みたれ
梨の木よこらへてくろよ枝まける
うららかながら枝まけの首のたるさ
梨の枝しんじついこしうまけるなり
梨の枝々に陽照ればまけるなり
枝まけの顔日に焼けるままなるかな

まけてゆくほき枝を鳴くは雲雀かな

下駄は緒と一緒にひがんまるりなり

それさ大丸鬘のひがんまるりなり

ひがんまるりの大むすめしよなしよなこ

だいじなあたまさけにゆくひがんまるりなり

さいせんを投げればそれでひがんなる

中日の廓ひる見世はりにけり

大屋根に布團干したり雲雀なく

春日照りこぼるる労働者の布團

夫婦者うららかに布團干したり

やつこ春らしくなりましたかな

鳴くはひばり 白妙の山照り寂し

蝶ひこり青麥ばたけわたりくる

邪魔なものひらくよけてゆく蝶々

蝶々よそれそれそこに糞がある

あたたかうくもり來蝶々風邪ひくな

うららかの堤ゆくのはおこきかも

二夜の夢

春の日のなきがらひこり麥の中

春雨の追ひかけて飯をくひけり

足袋ぬいでうららけき足の裏かな

春の日の梨畑者口さわがしかりけり

春の朝ほらけの雀 枇杷の木に

春は悲しや

春の日の食はせや育つ子なるかも
春の日の親はなうても子は育つ
春の日強ヨのててなし子なるかな
春の日のほつたらかされるて子泣く
しばらく泣き忘れたる子の春の日
春の日の泣く子をみながめてる犬かな
泣きくたびれて寝る子の春の日なる
かぎろひてまひるの影みじかくなりけり

かぎろひてまひるの鴉 黙もく深し

大腹の女を鳴くは雲雀かな

かぎろふままにをまごころをんなかな
うららかなる地面音すもあゆみゆく
ひる深くかぎろひて鳶の羽ネひろけ